

研究タイトル：

## 地域振興における地理学・地誌学的アプローチによる展開

氏名：	児玉 恵理 / Eri Kodama	E-mail：	ekodama@gifu-nct.ac.jp
職名：	講師	学位：	博士(理学)
所属学会・協会：	日本地理学会、地理空間学会、企業法学会ほか		
キーワード：	地域ブランド、グリーンツーリズム、持続可能性、農業労働力		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地理総合・地理探求の教育方法</li> <li>・グリーンツーリズム(エコツーリズム、コンテンツツーリズム)による観光振興</li> <li>・地域振興における農産物のブランド化戦略</li> </ul>		

### 研究内容： グリーンツーリズムの展開に関する地理学研究、農林水産知財の保護・活用に関する研究

農業地理学、観光地理学に関する道の駅併設の農産物直売所の役割、農産物の地域ブランド化・個人ブランド化の展開、都市農業の持続可能性などのテーマについて、グリーンツーリズムの観点から研究しています。

道の駅併設の農産物直売所は、多様な機能をあわせもっています。農産物直売所は、近隣の住民にはコミュニケーションの場を与え、遠方の人たちには観光の面を見せています。また、道の駅では、新たに防災機能などの多様化が図られています。道の駅併設型の農産物直売所は、道の駅の機能の多様化と定期市と類似する農産物直売所の取引形態の機能とが融合した地域振興や観光などへ展開する起点となっています。

深谷ねぎの近郊野菜としてのブランドは、大正時代から始まり、一時は有名無実化され、再登場といえるものです。地域振興の地域ブランド化は、近郊野菜の品種と品質が保証され、安全・安心な生育方法による複合化したものが求められます。近郊野菜の地域ブランド化と個人ブランド化との関係は、「顔の見える」農業の確立した個人ブランドをもとに、その地域の行政による地域ブランドへのサポートという産地偽装のない地域振興が理想的な形態になっています。

宅地化が進む地域では都市農業がどのように持続されているのかを労働力に着目してみます。都市農家は、農業に関心を持ち、生活基盤のある都市住民を補助的労働者として雇用することで、収穫・出荷作業の効率化につなげています。一方、都市住民は観光的要素を含む都市農業に携わっています。このように都市農家の労働力確保と都市住民の農業参加への意欲の合致により、都市農業が持続可能になっています。都市農業を単なる収入確保のためと考える人もいれば、観光ととらえる人もいるのです。

また、グリーンツーリズムの観点とともに、自然地理学、エコツーリズム、コンテンツツーリズムの観点から、歴史都市の防災における地理空間情報活用による文化遺産・防災と観光に関する研究への展開をはかっています。たとえば煙樹ヶ浜松林の環境保全活動を通して、過去の自然災害の状況やその後の復興について学ぶという防災教育を行うことは、今後の防災・減災対策につながっています。煙樹ヶ浜松林の環境保全活動のかかわりからの防災教育がその地域にとって最も有効です。

さらに、地域振興における地域ブランドや地理的表示保護は、農林水産知財制度の動向と深くかかわりを持っています。知財制度は、文化庁による著作権制度、特許庁による産業財産権制度、それに農林水産省による農林水産知財の三つがあります。特に農林水産知財の創造、保護、活用を促進するための仕組みについて調査研究を行っています。

### 提供可能な設備・機器：

#### 名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	